

阿閼仏に関するチョネ・ダクパシェードゥプの信仰と実践

—— 東西二つの浄土とそこへの往生について ——

藤 仲 孝 司
中御門 敬 教

はじめに

大乘興起時代の代表的な仏にアクションブヤ (Skt. Akṣobhya, Tib. Mi 'khrugs pa) がいる。この東方妙喜 (Abhirati) 世界の主宰者は、漢訳では音写して阿閼, 阿閼鞞, 意味から不動, 無動, 無怒などとされる。原意の不動, 無動は〈阿閼仏国土経〉(以下〈阿閼経〉)¹⁾によると, 阿閼菩薩は憎しみや瞋恚がなく, それらによって心が動じない難行を行なったために, そう命名されたという。この仏の起源は, インドラ神や釈迦仏との関係も指摘されたが, 詳細は不明である。この信仰の成立期は, 〈阿閼経〉に後漢支婁迦讖訳があるので, 2世紀中頃を下らない。近年, 支婁迦讖訳の原語はガンダーラ語ともいわれ, その信仰の原初・展開地域が注目されている。

根本經典である〈阿閼経〉の構成は, 支婁迦讖訳では全5章(発意受慧品, 阿閼仏刹善快品, 弟子学成品, 諸菩薩学成品, 仏般泥洹品), 菩提流志訳では全6章(授記

1) 〈阿閼経〉には現時点で蔵訳と漢訳の存在が報告されている。

【蔵訳書名】

1. Jinamitra, Surendrabodhi, Ye shes sde 共訳 (9世紀初頭)

'Phags pa de bzhin gshegs pa mi 'khrugs pa'i bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo (P. 大谷 No. 760-6, dKon brtsegs, Dzi. 1-80a, D. 東北 No. 50, dKon brtsegs, Kha. 1b-70a * 以下「大谷 No. 760-6」「東北 No. 50」を省略する。)

2. 敦煌本〈阿閼経〉(上記とは別系統。cf. 佐藤 [2001])

【蔵訳奥書】

1. 「(P. Dzi. 80a4-5, D. Kha. 70a6-7)『聖大宝積法門十万品』から『阿閼の莊嚴の章』といわれるもので, 『大宝積経』第6 [章] が終了した。インドの和尚ジナミトラとスレンドラボーディと主要翻訳師尊者イエシェデが翻訳し, 請願して, 確定した。」

【漢訳書名】

1. 後漢支婁迦讖訳『阿閼仏国経』(『大正蔵』11, No. 313, pp. 751-764)

2. 唐菩提流志訳『大宝積経』「不動如来会」(『大正蔵』11, No. 310-6, pp. 101-112 * 以下, 出典を示す場合にはこの菩提流志訳を出す。)

莊嚴品、仏刹功德莊嚴品、声聞衆品、菩薩衆品、涅槃功德品、往生因縁品)、蔵訳は全6章で各無題である²⁾。各章では阿閼仏の前世、彼の妙喜世界の莊嚴、その声聞衆及び菩薩衆、阿閼仏の涅槃、そこへの往生が主題となる。

〈阿閼経〉は阿弥陀仏信仰ないし極楽世界を理解する上でも重要である。〈無量寿経〉所説の、特に極楽世界の莊嚴と類似した記述が多いし、さらに極楽世界の特徴を表す「仏国土功德莊嚴」(Skt. buddha-kṣetra-guṇa-vyūha, Tib. sangs rgyas kyi zhing gyi yon gtan bkod pa) という語の説明がある。

「仏国土の諸々の功德莊嚴は特別の誓願 (smon lam gyi khyad par) によって成就する。舍利弗よ、私が以前菩薩行を行っていた時、誓願をたてた通りになったごとくである。」³⁾

ここでは〈無量寿経〉〈阿弥陀経〉とも共通する、仏国土経特有の誓願と仏国土の関係が説かれている。さらに行法においても行者の臨終時における尊格の来迎、死後に摂取を受け仏国土へ往生する点⁴⁾、またその往生行⁵⁾ など両者には共通点が多い

2) 漢訳と蔵訳の対応関係は佐藤 [1997] [1999] [2002] を参照のこと。

3) P. Dzi. 24b5-7, D. Kha. 21a1-3, 流志 p. 105a7-9; 本経の主たる対告衆は舍利弗である。

4) P. Dzi. 62b7-63b5, D. Kha. 54b7-55b3, 流志に明確な対応箇所なし

「舍利弗よ、かの世尊・如来・応供・正等覚・仏・阿閼が以前菩薩行を行っていた時、[かの仏は]、

『ああ、無上正等覚を等正覚した仏の仏国土に生まれたいと望む者、彼ら衆生が臨終の時、声聞のサンガが圍繞し、菩薩の集いが面前に並び、私も彼ら[衆生]の面前に住して、彼ら[衆生]も私を見て、心がたいへん歡喜して、忘念なく、心が動じずに[彼らは]死んでから、私の仏国土に生まれますように。』

とこのように大誓願をたてたのだから、舍利弗よ、善男子、善女人のある者のうち、かの世尊・如来・応供・正等覚・仏・阿閼の名号を聞いて、聞いてから作意して、阿閼如来の御身が象座の蓮華座に坐られた莊嚴を千[個]作らせるならば、いつか、かの善男子と善女人が臨終の時、世尊・如来・応供・正等覚・仏・阿閼の声聞のサンガが圍繞して、菩薩の集いが面前に並んでおかしになり、かの[善男子、善女人]もかの世尊・如来・応供・正等覚・仏・阿閼が面前に居られるのを見る。そして見てから心が歡喜し、忘失せず、心は動揺せず、臨終の時となり、死んでからも世尊・如来・応供・正等覚・仏・阿閼の仏国土・世間を歡喜して、そこに生まれるでしょう。

いつか、善男子あるいは善女人が布施の法を行ふならば、臨終の時、かの世尊・如来・応供・正等覚・仏・阿閼を見て、そして見てからあらゆる障礙が除かれ、その仏国土に生まれるでしょう。

舍利弗よ、かの世尊・如来・応供・正等覚・仏・阿閼は以前菩薩行を行っていた時、

『ああ、私が無上正等覚を正等覚した、その仏国土に生まれたいと望む者、彼ら衆生が臨終の時、私は声聞のサンガに圍繞され、菩薩の集いによって面前に親しく見られる。

[私は]彼らの面前におり、彼らが私を見て心は信仰(dad pa)し、忘失せず、心は動ぜずに死んでから、私による仏国土に生まれますように。』

とこのような誓願をたてた。』

5) P. Dzi. 60b8-61a5, D. Kha. 56a3-7, 流志に明確な対応箇所なし

「さらに舍利弗よ、この世尊・如来・応供・正等覚・阿閼の仏国土には、如来の数に入り*、仏の数に入り*、一切智者の数に入る*菩薩摩訶薩の大香象や大牛香象など無量の菩薩摩訶薩がいる。善男子や善女人が無数のそうした者達の名前を聞くなら、さらに彼の仏ノ

(cf. *L-Sukh.* chp. 27 etc., *S-Sukh.* chp. 10)。漢訳年代から見ると両経は成立時代が近く、この二仏は当初から東西一組の諸仏として認知されていたとも推測できる (cf. 芳岡 [1962])。また両経ともに、伝統的な輪廻説ないし生天説、四向四果説に対して、浄土への往生という新たな死生観を提示する。さらに、両経の内容は広く流布したが、大乘の論書に直接的な引用がないこと、後に密教の五仏となったことなども共通する。

次に両経の相違点であるが、〈無量寿経〉では仏国土の莊嚴の摂取と浄土への救済性が統一的に際立って示されるのに対し、〈阿閼経〉では広目如来からの授記を介した同一仏国土の「継承」と「展開」が示される上、仏の寿命や涅槃、浄土での女性の存在、自己の修行に関する誓願、六波羅蜜の重視など、種々の要素が混在している。また両経とも初期の漢訳では仏の入滅が説かれるが、後の〈無量寿経〉ではそれが消えるのに、〈阿閼経〉ではそのままであるなど、仏身観に違いがある。

インド仏教圏では阿弥陀仏信仰には及ばないが、阿閼仏信仰も広く言及が見られた⁶⁾。阿閼仏は7世紀頃の瑜伽タントラ〈初会金剛頂経〉において五仏のうち東方の金剛部の正尊となり、さらに後期密教では大日如来をも凌駕して五仏の中心に位置する事例もある⁷⁾。さらに修行を重視する性格も相俟って、チベットでは行者として有名なミラレバ (Mi la ras pa. 1040-1123) やゲルク派の開祖ツォンカバ (Tsong kha pa. 1357-1419)⁸⁾ なども阿閼仏とその浄土やそこへの往生を言及している。しかし後世になると、一般的に阿弥陀仏信仰が盛んであったのに対して、他方の阿閼仏信仰ははるかに弱い。特に中国など東アジアではこの仏に関する著作はほとんどないようである。唐不空訳『阿閼如来念誦供養法』(『大正蔵』19, No. 921)、『阿閼仏心陀羅尼神咒』(Jx01502V)、『阿閼仏咒』(P. ch. 2104V-17) が、経典を除いて唯一確認しえたものである。理由として、阿弥陀仏は本願による浄土の建立と救済の構造が明確で力強いのに対して、〈阿閼経〉は、出家や持戒など修行を重要視する性格を含めて種々の要素が統一されぬまま混在していることが一因となっているようである。〈無量寿

、国土に誓願をたて生まれようとするなら、あらゆる波羅蜜を含んだ善根を、世尊・如来・応供・正等覺・阿閼に廻向することによって、[彼らが] 彼の仏国土に将来生まれることは揺るぎないだろうし、[それは] 言うまでもない。舍利弗よ、それはまた菩薩摩訶薩が彼の仏国土に将来生まれる原因であり、それはまた条件である。」

* Tib. grangs su 'gro ba (Skt. samkhyām gacchati cf. *Mvp.* No. 6632 (榊本)) は、「～と称される」「名付けられる」といった意味となる。原拠では、将来、それらになるとされている。

6) 岡本 [1979]、佐藤 [2004] [2005] 等を参照。

7) 頼富 [1990] p. 314ff.

8) ツォンカバの小品『阿閼に対する願文』(P. 大谷 No. 6024) では、過去に広目仏のもとで最高の発心をし、成就した妙喜国の中央にいる阿閼仏に対する敬礼が説かれ、阿閼仏はその仏道修行の偉大さで無比の存在として称えられている。

経」と〈阿閼経〉の対告衆を比較すると、前者は「阿難」「弥勒」、後者は「舍利弗」である。「阿難」「弥勒」は教法の受持、未来世の志向を象徴するのに対し、「舍利弗」は智慧や空を志向した厳しい修行を連想させる。この配役は両経の特徴をうまくおさえたものとなっている。

さて本稿で和訳研究する、『勝者阿閼の国土の莊嚴』（以下『莊嚴』）⁹⁾の著者チョネ・ダクバシェードゥプ (Co ne Grags pa bshad sgrub. 1675-1748) は、チョネ（現在の甘肅省にある）出身のゲルク派の僧侶である。故郷チョネ及びラサ周辺で大いに活躍し、セラ寺の教科書著者としても有名な学僧である。五部大論（般若、中観、論理学、律、俱舍）に詳しく、顕密双方に通じ、生涯において300近い著作を残した¹⁰⁾。

9) 本著者は、『階梯』: *rGyal ba Mi 'khrugs pa'i zhing la mam par lta ba byed—Zhing mchog der bgrad pa'i them skas—*（勝者阿閼の国土を見せるもの——かの最上国に往く階梯——）と『階梯』の直後に掲載された『阿閼の最上国開門』（*Mi 'khrugs pa'i zhing mchog sgo 'byed, Co ne grags pa bshad sgrub kyi gsung 'bum, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs*（天津古籍出版社（以下『チョネ全集』））41, 11b-16b, pp. 174-176）の2つを先に著作していた。『階梯』を殆どそのまま用いてそこに『阿閼の最上国開門』から七支供養と誓願を含む段を組み込んだのが、『莊嚴』: *rGyal ba Mi 'khrugs pa'i zhing bkod*（勝者阿閼の国土の莊嚴）である。そのため、『莊嚴』の読み取り難い箇所は『階梯』により補足可能である（『階梯』の副題にある「最上国 (zhing mchog)」は一般的に浄土を意味するようであり、今回は阿閼仏の東方妙喜世界を指す）。

なお TBRC Resource Code: P1629には、『階梯』に相当する著作の別名として、『勝者阿閼の国土の莊嚴・誓願——グル・ヨーガの類——』（*Mi 'khrugs pa'i zhing bkod smon lam—Bla rnal sogs—*）を挙げる。

【奥書】『階梯』

「(11a5. ff.) 『勝者阿閼の国土の莊嚴の經典』にある意味をまとめて示したこれは、顕教・密教と口訣の要点全てを了解なさり、勝尊に親近する能力をも得たことにより、善巧であり成就した処に数えるにふさわしいシャーキャの比丘ゲルツェン・ペルサン（の御言葉により勧められたことによって、チョネの法相（顕教）のラマの地位にある該博な論者ダクバ・シェードゥプが急いで著作した。吉祥たれ！）」

【刊本所在】

『莊嚴』: 『チョネ全集』44, 1a-8a, pp. 108-111

『階梯』: 『チョネ全集』41, 1a-11b, pp. 169-174

なお TBRC Resource Code: P1629は『階梯』に相当する著作の刊本所在として二作挙げる。版本の対応は今後調査が必要である。

10) ここでは *Dung dkar tshig mdzod chen mo*（中国蔵学出版社、2002年、pp. 781b-782a）からの掲載文を不完全ながら試訳した。諸賢の御教示を賜りたい。
「ドメのチョネ領主の属下にあるトゥウージュ地方のチェダクヨーサあるいはラブポといわれる所で父キャプブムと母ケルサンメン二人の息子として第11ラブジュン（1675）年に誕生した。7歳でティチェンの比丘ダクバのもとから文字、書写、読誦の学習を開始した。9歳でその尊者のもとで出家した。それから数年の間、法行等の暗記をなさった。医者（の）タクリ比丘のもとから医術書を聞いて修学したことにより、病を治療する行いを幾分成就した。21歳で中央〔チベット〕にお往きになった。22歳でセラ・メのトゥサムリン学堂で仏法を修学なさった。尊者タシベルサン・ゲゲンに仕えて五部大論を聞思なさった。31歳でラサの大誓願祭において試問を受けることにより称号を受けようと考えたが、中央で争乱が生じたので摂政〔サンギエーギャムツォ〕が亡くなられた。その年の8月に宗派に属さない僧衆2万余り程度を集めた臨時の大誓願祭の地において、親教師ツルティム・リンチェンの御言葉通り称号を受けられた。尊者自身、ツァンのタシフンポにお往きになりパンチェン・ロサノ

『莊嚴』は、彼自身の著作『勝者阿閼の国土を見せるもの——かの最上国に往く階梯——』（以下『階梯』）と願文『阿閼の最上国開門』を合纂した著作である。彼が〈阿閼経〉を要約した意図はその冒頭（cf. 後述「著作の宣誓」）と奥書（cf. 注9）に言及されるが、そこには勧請者の要請を承けて著述されるその経緯が示されるにすぎない。そこで対になっている以下の本文中の一段落と、同著者の極楽浄土に関する著作の冒頭を参照して、上記の点を再度確認したい。

・『莊嚴』

「(6b1.ff., 『階梯』 10b2.ff.) また、私たちのかの教主〔釈迦牟尼〕自身は、他の仏国土の賞讃を数回お説きになったが、特に極楽と阿閼の国土の2つについて、広大に賞讃をなさったのは、この〔娑婆〕国土の人々の殆どがそこに生まれることができるなど勝れた目的（必要性）をご覧になってからであるし、他の仏国土の或るものには生まれても、再び悪趣に戻りうることで、或るものには生まれることはきわめて難しいのである。」

・『極楽国土の莊嚴の話——その国土に往く階梯——』冒頭¹¹⁾

、ニエーシェーのもとで具足戒を受けた。中央にお往きになってからガデンとデブンを含めたものの〔問答大会〕において立宗したことにより、全員が驚きを生じた。32歳になられた折、ドメのチョネの寺に再びお往きになった。その機会にチョネの教主ゴシイ（Go shri）管長が当地の宮殿において御上（gong ma）に拝謁なさった折の命令のごとくに、管長は木牛（1714）年にその僧院に一つの顕教仏学院を新たに建てた。尊者自身年令が40になられた折、その僧院のラマとなられた。年令46才で仏学院のラマが辞職してから『仏道三要（出離心、菩提心、正見）』（ゲルク派常用仏典）等の論書の著述をなさった。尊者彼自身は『経・真言〔顕密〕の法統の歴代上師』と、『〔ツォンカパ著〕『真言道次第論』の心髄要義』と、『〔ゲルク派の三大本尊〕秘密集会・勝樂・金剛怖畏三尊のグル・ヨーガ』、『普明〔大日〕儀軌の編』、『有情〔世間〕・器〔世間〕の規定』、『〔ツォンカパ著〕『菩提道次第論』の赤導の小広論』、『〔仏教〕四大学派の見の規定』、その註疏を完成して『秘密集会の我生起の編』、『勝樂根本タントラの註』、『阿毘達磨俱舍論の註——意趣善明——』、『根本中論の註疏——正理海に入る船——』等の著作11経函余りの御大作を著述なさった。年令57才になられ、第12ラプジュン（1731）年に再びその僧院の座主になられた。年令58才で密教仏学院を建ててラマと軌範師を兼任なさった。年令62才で講説、弁論、著作の3つによって時を過ごすようなさったはてに、年令75才、第13ラプジュンの土巳（1749）年に般涅槃なさった。」
cf. 立川、石濱、福田 [1995] p. 77, Tibetan Buddhist Resource Center (TBRC Resource Code: P1629), 望月 [2005] pp. 128-129

11) 【書名】

bDe ba can gyi zhing bkod brjod pa—Zhing der bgyod pa'i them skas—（極楽国土の莊嚴の話——その国土に往く階梯——）

【刊本所在】

・『チョネ全集』44, 1a-10a, pp. 112-116

【奥書】

「(10a5) これもまたシャーキャの比丘ダクパ・シェードゥブが浄信をもってチョネ寺において編纂した。〔その〕筆受者は、ターイ・ラルン・ロサン・ドンドゥブポ（Ta yi la lung Blo bzang don grub po）です。」

【全体構成】

〈無量寿経〉やそれに基づくツォンカパの〈最上国開門〉による著作である。特に器世ノ

「(1b4.ff.) それも一般的に、仏陀世尊全てにおいて、かつて国土を浄める加行を通じて成就した受用〔身〕変化〔身〕の浄土が2つずつ有ると説かれているが、受用身の国土においては眷属は聖者の菩薩のみにより満たされたの以外、凡夫は生じないし、それだけでなく、変化身の国土の或るものにおいても眷属は菩薩だけ、或るものには凡夫が有るが、〔そこに〕生まれる因は成就しがたいし、或る国土には生まれても再び悪趣への転落がありうるので、目的が成就しない。〔他方、〕極楽〔浄土〕と阿閼〔如来〕の国土に生まれる因は成就しやすいので、この〔娑婆世界の〕国土の教化対象者が成就したなら、そこに生まれることをお考えになって、教主〔釈迦牟尼〕はこの2つの『国土の莊嚴の經』を別に広積なさったし、〈大解脱經〉にも「私が阿閼〔如来〕の世間と極楽世界はきわめて清浄なを見るならば、「苦」という名もない。」と説かれている。特に經とガラニの儀軌 (kalpa) の多くに利徳を述べた個所に「極楽に生まれる」と多く説かれて

- 、問と有情世間を説く段は、〈最上国開門〉の文言を承けた「再録」といってよいほどである。この著作では往生の因（ツォンカパの〈最上国開門〉では仏隨念、積善、發心、廻向が往生の四因とされる）を冒頭に置いている。内容的に近似しているのに記述の順序が異なるのは、各々の原拠の反映であろう。その構造は以下のとおり。

題名 (1a1.ff.)

0.1. 阿弥陀仏に対する敬礼偈 (1b1.ff.)

0.2. 著作目的 (1b2.ff.)

0.3. 序論 (1b4.ff.)

1. その国土に生まれる因 (2a3.ff.)

1.1. 無量光仏をたびたび念じて名から唱えること

1.2. 多くの善根を積むこと

1.3. 正覺に發心すること

1.4. 積んだ善根をかの国土に生まれるために廻向すること

1.5. その国土に生まれたい意欲(信樂)により誓願を立てること

1.6. 国土の器〔世間〕・有情〔世間〕の功徳の莊嚴を『經』に説明されたように念ずること

2. 国土の讚 (2b4.ff.)

2.1. 器世間の功徳 (2b5.ff.)

2.1.1. 大地を美しくするもの——樹の功徳 (2b5.ff.)

2.1.2. 大地を美しくするもの——水の功徳 (3b5.ff.)

2.1.3. 大地を美しくするもの——蓮華の功徳 (4a4.ff.)

2.1.4. 大地を美しくするもの——莊嚴の樓閣と受用の功徳 (4b2.ff.)

2.2. 有情〔世間〕の功徳——有情〔世間〕の国土を美しくするもの

2.2.1. 共通の功徳 (5a1.ff.)

2.2.2.1. [特別の功徳] その国土の勝者の二種類の眷属——声聞と菩薩 (6a2.ff.)

2.2.2.2. 菩提樹の功徳 (7a4.ff.)

2.2.2.3. 国土の正尊の功徳の一分ほどを述べて意の願を祈願する (7b6.ff.)

3. 国土の功徳と往生への信樂を修治した利徳 (9b1.ff.)

4. 極楽往生に関する教証——〈無量寿經〉〈藥師經〉〈白傘蓋仏母ガラニ〉〈普賢行願讀〉 (9b5.ff.)

5. そこに生まれる方便または因の誓願——〈最上国開門〉〈普賢行願讀〉 (10a2.ff.)

奥書 (10a5.ff.)

いるのである。よって『極楽国土の莊嚴』の心髓をまとめて説明しよう。」

この記述から作者は、娑婆世界の住人は阿弥陀仏と阿閼仏の浄土には往生しやすく、両仏以外の浄土に仮に往生しても再び悪趣に堕ちる点を共通点としている。両浄土のうち阿弥陀仏の西方極楽浄土が東アジア漢語仏教圏で特に注目されるのに対し、著者は東西の浄土を一組にして、両者を等しく重視している。彼は17-18世紀の人物であるが、純粋に經典に依拠しており、インド圏大乘仏教における2つの浄土観が簡潔に浮き彫りになっているのである。ちなみにチョネ・ダクパシェードゥプ以外にも、ツォンカバやギエルケンポ・タクパギエルツェン（1762-1836）が両浄土を対象とした著述を行っている。さらにイエシェデモ〈普賢行願讃〉釈においてすでに両浄土を一組のものとして扱っている。

さてこの『莊嚴』は、〈阿閼経〉を要約した稀少な顕教典籍であり、大部の原拠（例、北京版約160頁）の要点を知るために非常に便利な著作でもある。要約の様式としては原拠の構成に従った科文を立てており、内容と順序はほぼ一致するが、引用はわずかであり、ほとんどは祖述的な取意である。各章の終わりには、内容をまとめた偈頌が置かれている。独自の評価や思索が見られるわけではない。

以下に、『莊嚴』の全訳を示すが、翻訳にあたっては『階梯』の対応箇所、さらに両著の部分的な増減の箇所をも記した。さらに「著作目的」に出る6項目を利用しながら、内容を考慮して科文をも付けた。その際、（ ）をつけた見だしは私につけたもの、つけない見だしは本文中の文言をいかしたものである。注記においては原拠蔵訳と漢訳（菩提流志訳）の出所を示した。頁数の関係で先行研究には多く言及できなかった。

【試訳】『勝者阿閼の国土の莊嚴』

(1a, 『階梯』 1a) 『勝者阿閼の国土の莊嚴』がございます。

(1b1.ff., 『階梯』 1b1.ff.) 師に敬礼する。

(0.1. 敬礼偈) (1b1.ff., 『階梯』 1b1.ff.)

(阿閼仏に対する敬礼偈)

究竟の広大な誓願により生じた希有な究竟の国土において、
清浄な究竟の眷属により圍繞され、[障の] 断・[智の] 証を最高に成就した
究竟の善逝阿閼如来に対して、究竟の尊敬をもって礼拝する。
究竟の最高の妙喜国土に、究竟の大悲により導いてください。

方便・智恵の風車¹²⁾により近く導かれた、
 [障の] 断・[智の] 証の東山の頂上より勝っている、
 [世の] 衆生の知界の闇を永久に除く、
 牟尼王¹³⁾ [である] 論者の太陽に対して、敬って礼拝する。

(文殊菩薩に対する敬礼偈)

広大な勝者の智慧の蘊全てを、
 1つにまとめても、その知性の一分をも、
 表示できない「大きな智恵の蔵」といって、
 広く知られた堅固な輪 [たる文殊菩薩] は、伺察を授けてください。

(宗祖ツォンカパに対する敬礼偈)

その者が五髻 [としての本来の文殊菩薩の姿] を捨ててこのチベット国に、
 勝者の正法の意趣の通り、
 如実に受持するために、[僧侶姿の变化身として] 袈裟の舞により
 遊戯したかの尊者ツォンカパに敬礼する。

(0.2. 著作の宣誓) (1b4.ff., 『階梯』 2a4.ff.)

昔、仏子阿閼が清浄な究竟の誓願によって撰取した妙喜国土の莊嚴を、勝れた人により勧められたから、要約したものを私は書こう。

(0.3. 著作の綱要) (1b5.ff., 『階梯』 2a6.ff.)

それについては、ここには、

1. 世尊阿閼がかつて菩提行を学んだ時、発心して誓願をたてた仕方
2. 浄土の成就 [には、器・有情の2つ。そのうち] の器 [世間] の莊嚴 [一般]
3. 有情 [世間] の功德の一般
4. [功德の] 差別 [としての第1,] 声聞の功德
5. [功德の差別としての第2,] 菩薩の功德

12) *rlung gyi shing rta* は『藏漢大辞典』によると、雲または馬とされている。〈普賢行願讃〉v. 60の注釈では極楽世界に往生した者が、雲を変化して救済すると説かれるなど、雲は慈悲による救済を連想させるものである (cf. 中御門 [2004])。

13) 「牟尼王」について声聞・独覚・仏の三牟尼のうちの仏をいう。『入中論』I 1にも言及される。松下 [1983] 注2には、「牟尼 (Muni) に尊称の〈Indra [主]〉が付されているのは、SDP [筆者註『二諦分別論註』のこと] (D. 36a1-2, P. 2b5-7) によると、世尊以外に「牟尼」と呼ばれる声聞 (śrāvaka)・独覚 (pratyekabuddha) との二者との区別を示すためであり、直接には『如來不思議秘密經』〈Tathāgatacintyaguhyānirdeśa〉(大正14)に基づくという。」

6. その国土に生まれる因

なるものを、〈[阿闍] 経〉にお説きになった通りの義をまとめて説明しよう。

(1. 世尊阿闍がかつて菩提行を学んだ時)

(1.1. かつての菩提行, 発心) (2a2.ff., 『階梯』 2b3.ff.)

それも勝者阿闍がかつて「広目仏」という者のもとで菩薩行を行ずる時、「阿闍菩薩」といわれる者になってから、効能の大きな発心により誓願をたてて¹⁴⁾、国土の莊嚴を攝取したのである。その「広目」仏はここから東の方にちょうど一千の仏国土「を超えたところ」に、「妙喜世界」という完全に清浄な仏国土が有る——そこに出現なさった¹⁵⁾のであるが、そのような国土そのものが現在の阿闍「仏」の国土と相続が同一¹⁶⁾であると思われる。

(1.2. 誓願のたて方) (2a4.ff., 『階梯』 3a1.ff.)

誓って誓願を立てた仕方は、〈阿闍経〉に、

「大徳・世尊よ、私はこの制定された通りの菩薩の学処を学びたい。」¹⁷⁾

などというのと、

「大徳・世尊よ、私はそれを誑ごまかしなく詔あざむきなく、誓言（三昧耶）と他に変わらない言葉により無上正覺に発心しよう。」¹⁸⁾

などということにより、一切衆生に対して瞋らないし、害心を為さない¹⁹⁾等、煩惱全てと混ざらない心により、

「[もしも] 一切智者の境位を成就していないならば、私は正覺しない。」²⁰⁾

などの堅固な誓いにより誓願を多くたてつつ²¹⁾、今後一切の生において名号が

14) cf. 香川 [1993] pp. 552-553

本作では広目仏の面前での誓いを誓願として理解する。しかし誓願に含めない見解もある。

15) P. Dzi. 3a5-6, D. Kha. 3a4-5, 流志 p. 102a20-22

16) ツォンカパは『入中論の釈論・意趣善明』(dBu ma dGongs pa rab gsal)「第六現前地」で四辺の生のうち他生を否定する個所に、「Prasannapada (p. 86, ll. 4-7) の中でも、等無間縁を否定するとき、芽の等無間縁が否定されているのであり、仏護もまた同様に認めているから、ここ「プラーサンギカの見解」では、[心・心所に限らず] 色においても等無間縁を認める見解である」(cf. 小川 [1988] p. 380, ツルティム, 藤仲 [2002] p. 87) といって、大乘教学のうち、唯心派では心やその連続性のみに実在性を認めるのに対して、中観帰謬論証派ではそれ以外の物質的なものについても連続性を認めるという。

17) P. Dzi. 3b2, D. Kha. 3a7, 流志 p. 102a25

18) P. Dzi. 3b6-7, D. Kha. 3b3-4, 流志 p. 102a28-29

19) P. Dzi. 4a1-2, D. Kha. 3b5-6, 流志 p. 102b1-3

20) 原拠では「～したならば、諸仏（類語）を欺くとせよ」という文体が通常である (cf. 光川 [1990] p. 266, 佐藤 [1999] p. 876)。しかしこの形式は〈無量寿経〉中の法蔵菩薩の誓願文に類似している。

21) 『莊嚴』smon lam mang du btab cing, 『階梯』smon lam mang du btab pa'i tshe

「阿閼」という者として生じる²²⁾。

仏子の海の主である阿閼。
賢劫の幾千の菩薩たちの中、
あなたと等しい者は一人もないし、
広大な国土においても得ることは稀である、
といって勝者自身が称讃したあなた以外の誰が [いようか。誰もいない]、
というのが、発心し、誓願をどのようにたてたかの箇所である。

(2. 浄土の成就の [うち] 器世間の莊嚴 [一般])

そのように誓願をたてた通りに円満に成就した国土が「妙喜」である。

(2.1. 菩提樹) (2b4.ff., 『階梯』 3b5.ff.)

その国土の中央に、菩提樹——七宝から成就している。高さとして十万由旬、周囲としては四万由旬あって、法音が生ずる等の功德を具えたもの——のもので [阿閼菩薩は] 等正覚なさった²³⁾。

2.2. その仏国土 (2b5.ff., 『階梯』 4a1.ff.)

その仏国土は大地の範囲は広く大きく、手のひらの如くに平らである。衣服は細綿衣のように触れたならば心地よく、色は妙金色のように輝かしく、神のマニ宝珠により飾られている。全てにわたって金色をしたコーティ・ナユタの蓮華によりみごとに莊嚴されている。曼陀羅華 (māṇḍārava) と大曼陀羅華の色々 [なものがあり]、多くの幹と棘と、瓦礫と普通の石と黒山²⁴⁾ はないし、大地に足を置いたならばふわりとして下がるし、足を上げたならばむくむくと上がる²⁵⁾。大地は、柔らかく、しなやか等の功德を具えている。

千万 [コーティ] の清浄な誓願の因の集積から
生じた清浄な国土、
一切相の莊嚴が最高に完成した妙喜 [国土]こそは、

22) 『莊嚴』『階梯』共に 'chags pa とあるが chags pa と読む。『階梯』はこの直後に「[[無数の] 勝者の海のもので発心なさったことにより、広大な誓願の海をたてた力により、清浄国土の海を撰取した。』を付す。

23) P. Dzi. 26b6-27a3, D. Kha. 22b4-23a1, 流志 p. 105a28-b4

24) 黒山は〈俱舍論自註釈〉(cf. D No. 4090, 146a7-b1) に説明がある。中インドから向かって北のヒマラヤ方向にある險山。

25) P. Dzi. 27b4-7, D. Kha. 23b2-4, 流志 p. 105b7-9

他の多くの最上国土より、特に勝れている。

宝の菩提樹により美しく、
金のような清浄さ等、功德が全く円満であり、
多くの幹、棘などの過失を離れており、
きわめて清浄な最上国土をあなたは讃嘆なさった。

というのは、器〔世間〕の功德の差別を述べた個所である。

(3. 有情〔世間〕の功德の一般)

3.1. 有情〔世間〕の功德 (3a3.ff., 『階梯』 4b3.ff.)

有情〔世間〕の功德は、その仏国土には三悪趣と、閻魔の世間の種類と五濁などはなく、そこに生まれた一切有情も全て十善の道に住する者のみである。そこでは有情たちには法王〔である〕仏以外は、君主と奴僕の違いは何もなく、諸々の資具に執着する我執もない²⁶⁾。さらにそこには苦がないので、風、胆汁、粘液が集まった〔諸々の〕病はないし²⁷⁾、人々には色の良くないことと香の臭うこともなく、貪欲などもきわめて小さい²⁸⁾。彼ら衆生たちには、互いに殺す、縛る、殴ること等は全面的になくて、外教徒の種類もない。樹々には常に華と果実が付いているし²⁹⁾、

3.2. 人々の服 (3a5.ff., 『階梯』 5a3.ff.)

人々の衣服は如意樹から生じた衣服——良い香りと五色を具えている。欲するものが自分の衣服になる³⁰⁾。

3.3. 食物 (3b1.ff., 『階梯』 5a4.ff.)

食物は自分の欲するどんなものも、その通りに面前に宝の器の中に生ずるし、〔その〕色・香・味は神の食事のようである。食物を食べても人々に大便と小便と唾と洩

26) P. Dzi. 27a8-b3, D. Kha. 23a6-b1, 流志 p. 105b5-7

27) P. Dzi. 27b8-a1, D. Kha. 23b5-6, 流志 p. 105b9-10

〈金光明經〉「除病品」(D. No. 556, Pa 259a1, 『大正藏』 16, No. 665, 448a-b) にこれらの増長、減少が四百四病の原因とされている。また室寺 [1993] p. 49によると、世親『緣起經釈』(D. No. 3995, Chi. 21b5-22a1) に、「風は病であり、大病である」という教証に関して、風は厳密には病そのものではないが、風 (vāta), 胆汁 (pitta), 粘液 (śleṣman) という三要素の不調和を意味する過失 (doṣa) の1つとして、病気の因であることが説かれている。

cf. 中川 [1989] pp. 27-28, 中川 [1993] pp. 123-130

28) P. Dzi. 28a1-3, D. Kha. 23b6-7, 流志 p. 105b11-12

29) P. Dzi. 28a3-5, D. Kha. 23b7-24a2, 流志 p. 105b13-14

30) P. Dzi. 28a5-6, D. Kha. 24a2, 流志 p. 105b14-18

はない³¹⁾。

(3.4. 精舎, 水, 風) (3b2.ff., 『階梯』 5a5.ff.)

彼ら人々が欲するならば、そこに七宝の座を具えた〔諸々の〕楼閣が生ずるであろうし、その楼閣には小さな池と、座上の綿の座具も〔欲する〕その通りに生じたものを楽しむ。それらの水も八功德を具えている。それらも自分に従い、もしも欲する時も従うことになるし、欲さない時も現れないことになる³²⁾。

風は〔暑からず、寒からず〕程よいものだけが起るし、その風からもきわめて芳しい香りが生ずる。それも欲するなら起るが、欲さなければ起らない³³⁾。

3.5. その仏国土の女性たち (3b4.ff., 『階梯』 5b3.ff.)

その仏国土の女性たちは、美しく意に適った天女のような者ばかりである。女性の過失全てを離れた者のみである。彼女たちは男と交合する身体が結生することがない。もしも或る男が誰か女に対して貪欲の心が生じたならば、その女性をほんの一瞬見たことにより、その欲は静まって離貪の禪定を得る。それ以後、貪欲の心は生じない。彼〔の男〕を見た女——彼女も妊婦となるし、母胎の男児または女児ができたのも、神の安樂のように殊勝な安樂を経験するし、七日たった時から金の館から出るように誕生する。母も第二禪の安樂のようなものを経験する³⁴⁾。子供が誕生しても不浄と悪臭は全くない。もしも誰かが何か装飾品——それを付けたいと望むならば、如意樹からその通りに生ずる³⁵⁾。

(3.6. 職業, 遊戯) (4a1.ff., 『階梯』 6a3.ff.)

さらに交易と農業を行う者たちはなくて³⁶⁾、遊戯も法悦による遊戯以外に、染汚ある遊戯はない³⁷⁾。

(3.7. 音声, 光明) (4a1.ff., 『階梯』 6a4.ff.)

樹々からも意に適った最高の音声が生じて³⁸⁾、常に仏の光明により遍満される以外、日月はないし闇もない³⁹⁾。

31) P. Dzi. 28b1-6, D. Kha. 24a4-7, 流志 p. 105b19-20

32) P. Dzi. 28b8-29a4, D. Kha. 24b2-5, 流志 p. 105b20-22, 27-29, c13-15

33) P. Dzi. 29a4-7, D. Kha. 24b5-7, 流志 p. 105c15-17

34) 色界の第一禪は尋・伺と喜・樂をそなえている。第二禪は尋・伺を捨てて、喜・樂をそなえている。第三禪は喜を捨てて、樂を具えている。

35) P. Dzi. 29a8-30b2, D. Kha. 25a1-26a1, 流志 p. 105c19-24

36) P. Dzi. 31ab3-5, D. Kha. 27a1-2, 流志 p. 105c24-26

商業活動等は仏道修行にとって好ましくないとされている (cf. ツルティム, 小谷 [1991] pp. 150-151, 232-233)。

37) P. Dzi. 31ab5-6, D. Kha. 27a2-3, 流志 p. 105c26-27

38) P. Dzi. 31ab6-32a2, D. Kha. 27a3-6, 流志 p. 105c27-29

39) P. Dzi. 32a6-8, D. Kha. 27b2-4, 流志 p. 106a3-5

(3.8. 勝者の足跡、蓮華) (4a2.ff., 『階梯』 6a5.ff.)⁴⁰⁾

かの勝者阿閼自身が処々に来られた時、御足は大地——そこについて、そしてそこに金色をした千の花卉を持つ蓮華が生じる。蓮華はそれらの人がそこにあるよう欲するならばあるし、欲さなければ虚空に浮かんでいるだろう⁴¹⁾。

(3.9. 神々) (4a3.ff., 『階梯』 6b1.ff.)

その国土の人々は神々を見て、神も人々を見る。彼らにおいて神と人の差別以外に、美しさと資具にはどんな差別もない。そこには金と銀と瑠璃から成就した宝の階段が、三十三天の住処までに至るよう設置されている——そこにおいて神・人は上下に行く。その時神は人を願うが、人は神を願わない等の功德を具えている⁴²⁾。

悪趣等の過失により汚されていなくて、
国土の莊嚴の功德全てを円満させて、
神よりも勝れた人が
[円満な] 具足の歓宴に常に遊ぶのは、ああ、驚きである。

誓願は強力であり、輪廻・涅槃全体の主、
救い主のあなたが国土の [円満な] 具足全てを
包摂したものにより、現在のこの最高国土は
このように過失によって染まるのであろうか。

というのが、「国土の情 [世間] の功德」を一般的に示した箇所である。

(4. 差別 [としての] 声聞の功德)

4.1. 正等覚者阿閼 [仏] の清浄な声聞のサンガ (4a6.ff., 『階梯』 7a2.ff.)

正等覚者阿閼 [仏] の清浄な声聞のサンガは無数であり、無量である。それも仏以外に世間の算術家の誰も数えることができない。言い換えるなら「無量」といわれる

40) 『階梯』は誤ってベチャ 6a の後に 7b を、7a の後に 6b を配置して影印している。

41) P. Dzi. 32b6-33a7, D. Kha. 28a1-b1, 流志 p. 106a11-20

42) P. Dzi. 33b4-34a7, D. Kha. 28b4-29a6, 流志 p. 106c2-12

三十三天の話は漢訳では第3章、チベット訳では第2章に出るが、原拠には阿閼仏国土では人の資財が三十三天より勝れているから、天が人を羨むとされている (cf. 佐藤 [2002] p. 123)。また、仏道修行においては人身こそが有暇具足の身であり、天は却って好ましくない。神々さえも善趣として人身を願うという考えもあるかもしれない (cf. ツルティム、藤仲 [2005] pp. 146-147)。

ものの数になる⁴³⁾。[声聞の四向四果として] 預流と一來などの名ほどはあるが、この仏国土の預流などと同じではない⁴⁴⁾。そこにおける声聞は凡夫よりも勝れた者が多いが、彼ら阿羅漢の殆どが八解脱を得ている⁴⁵⁾。彼らが行乞することはない⁴⁶⁾。

(4.2. 食事) (4b2.ff., 『階梯』 7a6.ff.)⁴⁷⁾

食の時に至ったならば、鉢に賢れた諸々の食事は望み通りに生じ、それも二、三口ほどによって満足するであろう⁴⁸⁾。

(4.3. 四墮罪) (4b3.ff., 『階梯』 7b1.ff.)

そこでは四墮罪は生じないので、[阿閼] 仏も⁴⁹⁾ 四墮罪と相応した法⁵⁰⁾ を説かず⁵¹⁾、最初から空性と相応した法を説く⁵²⁾。彼ら[声聞]は利根の者のみであり、出家の過患とされるものは彼らにはない。

(4.4. 虚空聞法) (4b4.ff., 『階梯』 7b3.ff.)

[阿閼] 仏が法を説く時、もしも[かの仏が] 虚空に浮かんだならば、そこで神力のある[声聞]、ない[声聞] 両者とも虚空に浮かんで聞法できる⁵³⁾。

(4.5. 涅槃) (4b4.ff., 『階梯』 7b4.ff.)

彼ら声聞が涅槃したいと望む時、種々の神変変幻を示して涅槃する⁵⁴⁾。

(4.6. 阿羅漢) (4b5.ff., 『階梯』 7b5.ff.)

煩惱の敵の集まり全てに勝って、

四神足を得た

阿羅漢は八解脱に安住する。

無数の[彼ら阿羅漢] たちが仏国土全てを満たしている⁵⁵⁾。

43) P. Dzi. 34b8-35a4, D. Kha. 29b6-30a3, 流志 p. 106b1-6

44) P. Dzi. 35b1-6, D. Kha. 30a6-b3, 流志 p. 106b14-18

45) P. Dzi. 36a6, D. Kha. 31a2-3, 流志 p. 106b27-28

46) P. Dzi. 36a7-b2, D. Kha. 31a3-6

47) 『階梯』は誤ってペチャ 6a の後に 7b を、7a の後に 6b を配置して影印している。

48) P. Dzi. 36b2-3, D. Kha. 31a6, 流志 p. 106c17-18; 光川 [1990] p. 267 には「それらの食事は23の食事がととのえられる」とあるが、原拠には de dag zas kha ma / gnyis sam gsum tsam gyis などとあり、本著と一致する。

49) kyi kyang とあるが文脈から kyis kyang とする。

50) 声聞の別解脱戒における四波羅夷や、それらからの還浄の法であろうか。

51) P. Dzi. 36b4-6, D. Kha. 31a7-b1

52) 原拠には四回説法がなされるという。なお〈集学論〉では鈍根の初学者に最初から深い空性の法を説くことは、菩薩戒の根本墮罪と1つとされている。

53) P. Dzi. 38a4-7, D. Kha. 32b5-7, 流志 p. 106c19-21

54) P. Dzi. 38a8-b7, D. Kha. 33a1-6, 流志 p. 106c22-24

55) P. Dzi. 39a3, D. Kha. 33b2-3, 流志 p. 106a28-b1

不善の墮罪に入ることがないから、
 墮罪の規定はそこにはない。
 食事、衣服等も努力なく生じるから、
 行乞せず常に幸福・安楽に住する。

というのが、声聞の功德を述べた箇所である。

(5. 菩薩の功德)

(5.1. 菩薩のサンガ) (5a1.ff, 『階梯』 8a2.ff.)

その国土には菩薩の眷属も無数であり、無量である⁵⁶⁾。彼らも海のような智慧と辯才、虚空のような法界を了解し、証得したのは、スメール山のように高い。

5.2. 仏の説法 (5a1.ff, 『階梯』 8a3.ff.)

そこで〔阿閼〕仏が説法するのは、賢劫の一切諸仏が説法することよりも広大であり⁵⁷⁾、それを受持する⁵⁸⁾のもその通りである。それだけでなく彼ら菩薩も他の仏国土から他に行って聞法するし、再び戻ってくる⁵⁹⁾。死去してからも欲するところの仏国土それぞれに生まれる⁶⁰⁾。

(5.3. 菩薩の特性) (5a3.ff, 『階梯』 8a6.ff.)

彼らは〔阿閼の仏国土において〕一生に⁶¹⁾、賢劫の千仏のもとで積んだ福德よりも多く〔功德を〕積むことができる⁶²⁾。

彼らは悪趣のようなものはもちろん、声聞〔地〕と独覺〔地〕にも退かず、全て無上正等覺菩提に決定した者のみである⁶³⁾。彼らに悪魔は妨害できず、無畏を獲得し⁶⁴⁾、安楽を具えた者だけである⁶⁵⁾。

56) P. Dzi. 39b7-40a2, D. Kha. 34a5-7, 流志 p. 107a17

57) P. Dzi. 40a8-b4, D. Kha. 34b4-7, 流志欠

58) P. Dzi. 40b4-41a1, D. Kha. 34b7-35a4, 流志 p. 107a24-25

de 'dzin par byed pa. 『中辺分別論』 V 9 に説かれる十種法行では、大乘の法について書写すること、供養すること、施すこと、聴聞すること、読誦すること、受持すること、解説すること、諷誦すること、思惟すること、修習することが挙げられている。ここでは菩薩の行動として「受持する」と翻訳したが、主語を仏として「受持させる」と読むべきかもしれない。原拠にも仏の誓願力により受持させるという記述があるからである。

59) P. Dzi. 41a1-7, D. Kha. 35a4-b2, 流志 p. 107a27-b1

60) P. Dzi. 42a1-2, DKha.36a2-3, 流志 p. 107b11-14

61) 本文は「de dag gis tshe gcig las」だが、原拠には「tshe gcig la」(P. Dzi. 42b4, D. Kha. 36b5)

62) P. Dzi. 43a2-7, D. Kha. 37a2-6, 流志 p. 107b28-c5

63) P. Dzi. 44b1-2, D. Kha. 38a6, 流志 p. 108c7-10

64) P. Dzi. 43b3-6, D. Kha. 37b2-4, 流志 p. 108b2-4

5.4. 菩薩衆の上首 (5a4.ff., 『階梯』 8b3.ff.)

無数の菩薩彼らの中での上首は二人——大香象菩薩といわれる者と、牛香象〔菩薩〕⁶⁶⁾といわれる者、二人である。

(5.5. 阿閼仏の入滅と法の継承) (5a5.ff., 『階梯』 A.8b5.ff.)

かの阿閼仏は寿命は百万大劫に住してから、〔変化身として〕涅槃の作法を示した後に、大香象菩薩がまさにその〔阿閼の仏〕国土自体において〔金蓮華如来として〕正覚する⁶⁷⁾。仏の正法はそれほどの大劫の後にも住するであろうし⁶⁸⁾、大香象〔菩薩〕の国土と眷属等も阿閼の時の通りまさに過不足ないものになるであろう (cf. 注 16)⁶⁹⁾。

5.6. 阿閼仏の名号を唱える (5b1.ff., 『階梯』 欠)

さらに阿閼の名号を唱えるならば、悪魔等の魔族によって侵害されず、業障が浄まり、雹^{ひょう}が起これば阿閼の名号から唱えて、強く祈願……?の力によって退けるであろう、と經典自体に説明される⁷⁰⁾。

無垢、清浄の堅固な発心により、
無量の衆生利益のために甲冑をまとして、
無量の菩薩行の海に遊戲し、
無数の菩薩の龍王の衆が称讃した。

きわめて多くの他の仏国土の勝者のもとに、
何度も行かれて、善釈されたきわめて深い正法を、
聴聞できる仏子全ては、
〔正定聚となって〕確実に正等覚から退転しない。

というのが、菩薩の功德を述べた箇所である。

65) P. Dzi. 44a6-8, D. Kha. 38a4-5 悪魔は他化自在天のことかと思われる。

66) P. Dzi. 52b3, D. Kha. 45b4, P. Dzi. 61a2, D. Kha. 53a4-5, 流志 p. 109a15

67) P. Dzi. 52a2-b5, D. Kha. 45a4-b6

68) P. Dzi. 57b3-6, D. Kha. 50a4-6, 流志 p. 109bb11-13, 20-21, c12-16

69) P. Dzi. 52b5-53a2, D. Kha. 45b6-46a3, 流志 p. 109a17-18

70) P. Dzi. 75b4-76a5, D. Kha. 66a4-b5, 流志 p. 112a19-24

テキストの状態が悪く「強く祈願」以下、一部解読不能である。

(6. その国土に生まれる因)

6.1. その国土に生まれる因と往生⁷¹⁾ (5b4.ff., 『階梯』 9a4.ff.)

その国土に生まれる因は、「以前の阿閼菩薩が菩提のために行を行ったその通りに行じよう」と思って、誓願をたてるならばそこに生まれる⁷²⁾。さらに自らが六波羅蜜を行ったその善等、およそなしたそれらの善全てを、阿閼の仏国土に生まれ、有情利益をなしてから、仏を得ようと誓い、廻向するならば、そこに生まれる⁷³⁾。さらに国土の功德を念ずるのと⁷⁴⁾、阿閼の顔を見たいと欲するのと⁷⁵⁾、彼に対して共にいたいと欲するのと、仏の眷属の数と功德を念ずるのと、阿閼の名号から唱えて敬礼するのと、造像するのと、供養する等と、二人の〔仏の〕長子の名号から唱えて、そこに生まれる誓願をたてるのと、他者にもそのように行うよう勧めるならば、そこに生まれる (cf. 注4.5)。要約すれば「その国土に生まれてから一切有情を饒益しよう」と思うならば、そこに生まれることになる。〔それらが〕因の主要なものである。

その国土に生まれたいと欲する彼らが死ぬ時、阿閼仏、〔その〕サンガの衆を随念し、誓願するならば、彼ら〔仏菩薩〕も彼のもとに赴いて見るであろうし、心が悦びながら臨終を迎えてから、その国土に生まれるであろうと説かれた (cf. 注4)。さらに『阿閼の国土の莊嚴〔経〕』から出ている義の中心を前に述べたそれらを自らが知って理解して受持し、他の者たちをその方軌に入らせるならば、阿閼仏は〔彼らのことを〕お考えになるであろうし、〔彼らは〕その国土に生まれる⁷⁶⁾。

6.2. その因が生じること (6a4.ff., 『階梯』 10a2.ff.)

そのように行う因が生じることとは、かの仏自身の威力と以前の誓願の力を除いて他には生じないと説明されている。国土の莊嚴の差別を述べたそれらを自らが知って受持し、他者に示すことに関する無量の利徳をお説きになった⁷⁷⁾ のも知るべきである。そこに生まれる少し広汎な誓願は、自分が傍らに述べ終わったごとく⁷⁸⁾、というのが、その国土自体に生まれる因を述べた箇所である。

71) P. Dzi. 58a7, D. Kha. 50b6, 流志 p. 109c23から6章が始まる。この科文は例えば P. Dzi. 58b3-4, D. Kha. 51a3, 流志 p. 110a2に見られる6章の定型句である。

72) P. Dzi. 58a8-b3, D. Kha. 50b8-51a2, 流志 p. 109c24-28

73) P. Dzi. 58b4-59b2, D. 51a3-b7, 流志 pp. 109c28-110a4

原拠に本文中の「衆生利益をなして仏を得るよう誓い」はない。

74) P. Dzi. 61b3-62a3, D. Kha. 53b4-54a4, 流志 p. 110a21-b5, あるいは P. Dzi. 62a6-7, D. Kha. 54a6-7あたりか。

75) P. Dzi. 63a8-b2, D. Kha. 55a7-b1, 流志 p. 110b11-14あたりか。

76) P. Dzi. 66b1-67a1, D. Kha. 58a3-b2, 流志 p. 10

77) P. Dzi. 72b4-75b4, D. Kha. 63b4-66a5, 流志 pp. 111c15-112a19あたりか。

78) 『階梯』の直後に収録された誓願文『阿閼の最上国開門』のことかと思われる。

(実践の仕方) (6a6.ff., 『階梯』 10a5.ff.)

[専注した] 一境なる尊敬する意により、その者の名号を受持、供養、讃嘆、祈願すること、およそそこに生まれる因の集まりが、何であるかを説明したことを、修行することが重要である。[因の集まりの中から唯一つ、] 阿閼勝者の名号ほどを受持するならば、悪趣から脱し、最上のその妙喜国土に生まれることができるであろう [。それ] なら、誰かが因の集まりをこのように修行 [・成就] したならば、もちろんである。

(東西の浄土への釈尊の称讃) (6b1.ff., 『階梯』 10b2.ff.)

また、私たちのかの教主 [釈迦牟尼] 自身は、他の仏国土の称讃を数回お説きになったが、特に極楽と阿閼の国土の2つについて、広大に賞讃をなさったのは、この [娑婆] 国土の人々の殆どがそこに生まれることができるなど勝れた目的 (必要性) をご覧になってからであるし、他の仏国土の或るものには生まれても、再び悪趣に戻りうることに、或るものには生まれることはきわめて難しいのである。

この2つの国土に対する称讃の仕方は⁷⁹⁾、〈大解脱経〉に、

「私が阿閼世界と、極楽世界がきわめて清浄なのを見るならば、「苦」という名もない。」

などと多くの経部にも称讃されており、特に『宝積 [部第6会の阿閼国土莊嚴]』に詳細にお説きになったのは上に述べ終わったが、誓願自体を例示ほど述べよう。

(七支供養と誓願) (6b4.ff., 『階梯』 欠)

それもこのように――

東方の一千の仏国土 [を超えたところ] から、仏子 (菩薩) たちを伴った善逝阿閼勝者は、眷属を伴い障礙のない神力によりここに来て、誓願を成就する証人となってください。以前、あらゆる世間の最高の導師、広目仏といわれる勝者のもとで、誓って誓願した通り完成した、世尊阿閼に敬礼する。あらゆる供養の集まりを献上する。罪・墮罪を個々に告白 (懺悔) する。善に随喜し、法輪を転じるよう勧請する。無数

79) 『階梯』は「称讃の仕方は、他の經典にお説きになったものも見られるが、例示ほどは～ (以下〈大解脱経〉の同文引用のみ)」とある。〈大解脱経〉の引用に続く『莊嚴』の増広部分は、『阿閼の最上国開門』 (Mi 'khrugs pa'i zhing mchog sgo 'byed), 『チヨネ全集』 41, 11b4-13b4である。〈大解脱経〉は漢文からの重訳とされるが詳細は不明。正式名称は 'Phags pa thar pa chen po phyogs su rgyas pa 'gyod tshangs kyis sdig sbyangs te sangs rgyas su grub par nam par bkod pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo, 引用箇所は P. 大谷 No. 930, Zu. 254a1-2, D. 東北 No. 264, 'A. 232b6である。

劫にわたり永い間、堅固に〔安泰に〕居られますように。これにより例証される善を大菩提に廻向する。

自他が三世において積んだ諸善根を一方に集めた威力に依って、自分が臨終に直面した時、海のような眷属が圍繞した中央に、煌々として居られる、如来・応供・正等覺者・阿閼仏を現前に見ますように。見るやいなや、仏子を伴った勝者を対象とする強力な信が生じた力によって、死去して、妙喜仏国土に生まれますように。生まれるやいなや、ダラニと辯才と神通と菩提心等の功德の集まり全て⁸⁰⁾を現実化して、勝者阿閼等の仏子を伴った十方の諸仏全ての御心を喜ばせてから、彼らが説いた妙法全てを聞き、受持しますように。その時、如来阿閼の〔仏〕子である長子大香象菩薩等のどんな行であれ、そうした大波濤行全てを完全に成就できますように。さらにあらゆる生において勝者阿閼が、以前、広目仏のもとで誓願をたててから究竟なさったその通りに私も成就しますように。私がそこで正覺するところの仏国土においては、悪趣という名もいわれず、きわめて清浄であり、眷属の円満のみの全てから生じたもの等、有情〔世間〕・器〔世間〕の大円徳〔である〕妙喜国土のような〔ところ〕において、現等覺しますように。いつか死の兆しが見えた時、海のような眷属の集いを伴った善逝阿閼を現前に見て、強力な信の力によって、死去し、妙喜国土に生まれますように。生まれるやいなや、ダラニと辯才と神通等、無数の功德の集まりによって〔自己の心身の〕相続が富み、〔仏〕子を伴った善逝を喜ばせてから、勝者のあらゆる妙法を受持しますように。阿閼勝者の最高の長子、大香象菩薩等のどんな〔大〕波濤行であれ、そうした全てを完全に成就しますように。かつて阿閼菩薩は仏の御前における誓いを究竟させて、浄土において現等覺したそのような最上の国土において、仏となりますように。

〔さらに〕「シャーキャ〔族〕の王、導師阿閼、無能勝（弥勒）、文殊、秘密主（大勢至）、観自在」⁸¹⁾とも述べるべきである。

80) 『莊嚴』は印刷不鮮明であるが、一応「ma lus pa」とする。『階梯』に対応語句はなし。

81) ツォンカバ著の極樂願文〈最上国開門〉の末尾（cf. P. 大谷 No. 6071, Ga. 101b7-8; 小野田 [1981] p. 155, 梶濱 [2003] p. 398）の文言を承ける。そこには、「シャーキャ〔族〕の王、導師無量光、無能勝、文殊、秘密主、観自在、眷属をともった善逝よ、縁起の欺かない諦によりこれら誓願が速やかに成就しますように」とあり、本作は「導師無量光」を「導師阿閼」に置きかえている。ここに挙げられる菩薩はいわゆる「八大菩薩」に含まれるが、八大菩薩は極樂願文〈最上国開門〉では中有から極樂浄土に導くよう祈願される対象であり（Ga. 97b1-2）、さらにそこでは阿閼比丘、文殊師利、観自在、秘密主は、釈迦牟尼、薬師如来、無量寿仏と共にそうなるべき目標として祈願されている。特に阿閼の箇所（Ga. 97b4-6）では、阿閼は出家や持戒を成就して大正覺を得た存在とされている。

(結びの偈頌) (7b5.ff., 『階梯』 11a1.ff.)

語ろう——

底・辺際の分からない大きな海の中央,
宝のインドラの網の山のごとく,
多様な眷属衆の中央に, その身が
煌々と明らかなる勝者阿閼よ,

誰かが尊敬をもって, この方向において,
病気と同じく——あなたの国土の莊嚴された仕方を,
道理に合うよう述べた人が,
欲さないこと全てから解脱するようにして下さい。

きわめて賢妙な勝者の王, あなたは,
きわめて悪い苦の海から済度した,
きわめて堅固な無上菩提の安楽の地に,
きわめて多くの有情全てをも引導して下さい。

この方軌において如理に三門 [すなわち身語意の業] の努力から,
浄白の多種のものを獲得したそれも,
生じ, 生じて有暇の依処 [の身] を獲得してから,
きわめて速やかに仏 [の位] を得るために廻向する。

奥書 (8a2.ff., 『階梯』 cf. 注9)

勝者阿閼の国土の功德を要約して述べたこれは, 長老ギェルツェンペルサンポが勧
請した折に, シャーキャの僧侶シェードゥプという名をもつ者が, チョネ寺において
著述した [。] 刊行筆記者⁸²⁾ は比丘ガクワン・タシ (Ngag dbang bkra shis) である。
吉祥たれ!

82) par yig pa, または par yi ge pa とある。先に著作されていた『階梯』と『阿閼の最上国開
門』を編纂してこの『莊嚴』を著作し刊行するにあたっての筆記者という意味であろうか。

【付録：チヨネ・ダクパシェードゥプの浄土教関連典籍】

阿弥陀仏関係

・『極楽国土の莊嚴の話——その国土に往く階梯——』（*bDe ba can gyi zhing bkod brjod pa—Zhing der bgrod pa'i them skas—*），『チヨネ全集』44, A Zhing bkod, 1a-10a, pp. 112-116

・『甚深道ボワの口訣類』（*Zab lam 'pho ba'i man ngag gi skor*），『チヨネ全集』37, Kha. 1a-6a, pp. 57-59

・『資糧田と関係する精髓の実践——極楽に往く善き道——』（*Tshogs zhing dang 'brel ba'i snying po'i nyams len—bDe ba can du 'gro ba'i lam bzang—*），『チヨネ全集』43, Kha. 1a-5b, pp. 99-101

・『〔無量〕寿の儀軌——無死の吉祥を与えるもの——』（*Tshe cho ga—'Chi med dpal ster—*），『チヨネ全集』37, Kha (tshe). 1a-24a, pp. 25-36

・『寿命丸の成就と寿命灌頂の作法——無死吉祥の施与——』（*Tshe ril sgrub pa dang tshe dbang bskur tshul—'Chi med dpal ster—*），『チヨネ全集』37, Kha (tshe sgrub). 1a-6a, pp. 37-39

・『寿命丸を成就する作法——無死の吉祥の施与——』（*Tshe ril bsgrub tshul—'Chi med dpal sbyin—*），『チヨネ全集』37, Kha (tshe dbang). 1a-2b, p. 40

・『文殊から尊者リンポチェなどに伝承された文殊流の無量寿五尊の認可』（*'Jam dbyangs nas rje rin po che sogs la brgyud pa'i 'jam lugs tshe dpag lha lnga'i rjes gnang*），『チヨネ全集』44, Kha (A tshe dbang). 1a-8a, pp. 80-83

阿閼仏関係

『勝者阿閼の国土を見せるもの——最上国に往く階梯——』の題名のもとには、同著作と関係する他の4つの著作が含まれている。この『階梯』全体に対する開版時の跋文にも、「かの主〔阿閼仏〕が国土の莊嚴を撰取したのを経に出ているのを善釈したものと、その国土に生まれる巧みな方便〔である〕誓願の仕方と、遷移の導き、髪の儀軌、見の要約〔である〕これは〜」（29a3-5）といて、5つの著作が1つにまとめられている。そのうち、第1の『階梯』以外の著作の概要は、以下のとおりである。

・『阿閼の最上国開門』（*Mi 'khrugs pa'i zhing mchog sgo 'byed*），『チヨネ全集』41, 11b2-16b5, pp. 174-176

題名自体がツォンカパの極楽願文（最上国開門）を強く意識したものと思われる。帰敬偈の後、阿閼の浄土は多くの経に称讃されるし、特に「宝積経」に広説されたその浄土の円満具足とそこに生まれる因は多いので、本体である誓願文を提示する、と

いう。この著作は『階梯』10a5に言及される「そこ（妙喜国）に生まれる誓願」のことかと思われる。

誓願文自体は、東方の浄土とそこの教主阿閼仏の存在——彼が過去に広目仏のもとで発心、修行して浄土が成就したことを明らかにしつつ誓願する。『莊嚴』に引用された部分は、阿弥陀仏の場合と同じく仏のかつての誓願、修行を述べ、それに倣って自らも行えるように祈願する部分、仏による攝取、引導により浄土に往生することを祈願する部分までである。以降の仏道修行を〈菩提道次第〉の枠組みで捉えた部分などは、再説と捉えたためか省略されている。奥書きの後には、『階梯』と同じく偈頌形式の跋文がある。

・No Title, 『チヨネ全集』41, 16b6-18a8, pp. 176-177

「ボワのグル・ヨーガ」に関する著である。グル・ヨーガは密教の本尊瑜伽の一部が独立し、チベットで密教の準備的修行として盛行した。本著は、ダライラマ2世やパンチェン1世などが著した弥勒や金剛怖畏のグル・ヨーガなどと関係した遷移（'pho ba）と同じく、阿閼のグル・ヨーガに結びつけた遷移も適切なものとし、1）自己の修治、2）掛け方からなっており、『莊嚴』と『阿閼の最上国開門』の支分として著作された。

第1の自己の修治では、自己の頭頂に阿閼仏を本尊として生起させ、その種字の転変した光から仏菩薩を招き、礼拝、帰依、供養を行う。身体の脈管の上下、識の滴を観想し、遷移が修まるよう祈願する。仏の心臓から光が自己の頭頂を通じて心臓に入ることを観想する。第2の掛け方は、臨終行儀であり、前述の祈願の後、妙喜国への往生を願い、識が梵浄穴から出て仏の心臓に溶け、浄土に往生するよう観想する。

・No Title, 『チヨネ全集』41, 18a6-20b1, pp. 177-178

「生者の毛髪または亡者のための遺骨の儀軌」である。自己を金剛阿閼として我生起、面前生起を行う。その後で、浄化と加持を得てから、髪と骨において真言の念誦を行って罪と障を浄化し、悪趣から脱することを願う。この著作も「ボワのグル・ヨーガ」と同じく他の著作の支分であると思われる。

・No Title, 『チヨネ全集』41, 20b2-29a1, pp. 178-183

「見の導きの略論」である。尊師ツォンカパのグル・ヨーガと関連した空観の指導書であり、偈頌形式で説かれている。まずツォンカパを観想し、グル・ヨーガを行う。次に見の実践として、1）[人・法] 二無我の決択の仕方、2）[空の三昧から出た後、] 後得において護りそだてる仕方、3）言説の設定の仕方という3つから構成されている。内容はツォンカパの中観説である（ただし人無我の決択を離一多の論証因

から始めている点は特異である)。著者は他の著作にも同様な「見の導き」を付けている。これは無自性空における業果への確信を導くものであるが、特にここでは、阿閼の発心と成仏や国土の成就、信からの修行とその果に関して重要な支分とされるのであろう。

以上これらの著作のきっかけについて、小品の2つである、第3の著作の奥書きには勧請した人への言及がなく、第4の著作の奥書きには「他者に勧められた折に」とだけある。しかし、その他の奥書きにはゲルツェン・ペルサンポ (rGyal mtshan dpal bzang po) の勧請にちなんだものとされている。この人はニンマにも詳しい長老であったこと以外は未詳である。この連作全体の最後の跋文には、「これは、経・タントラ一般と特に〔ニンマの〕九次第乗の要点を知る上座、持明者ゲルツェン・ペルサンポが、自己が勝れた人の授記から妙喜国に生まれるしるしが降りてきたように、そこに生まれる最上の方便を自らが修行し、他者にも増長させるために『阿閼の国土の莊嚴』『誓願』(阿閼の最上国開門)などを版に製造するとき、勧めたように、著作した。」とあり、これらの著作は阿閼に関する宗教体験がきっかけになって著されたようである。

【主な参考文献】（著者五十音順）

赤沼智善

- ・『仏教經典史論』（『赤沼智善論文集』3），破塵閣書房，1938年

岡本嘉之

- ・「阿閼仏国経試訳——附，阿閼仏に言及する經典一覧表——」（『東洋大学大学院紀要』16，1979年）

小川一乗

- ・『空性思想の研究』Ⅱ，文栄堂，1988年

小野田俊蔵

- ・「ツォンカバ造『最上国開門』試訳——チベットに於ける本願思想受容一例として——」（『仏敎文化研究』27，1981年）

香川孝雄

- ・『浄土敎の成立史的研究』，山喜房仏書林，1993年

梶濱亮俊

- ・『チベットの浄土思想の研究』，永田文昌堂，2003年

国際仏敎学大学院大学附属図書館

- ・『大蔵経対照目録Ⅱ 大正蔵・敦煌出土仏典対照目録』第2版，2006年

佐藤直実

- ・「蔵漢訳『阿閼仏国経』比較研究（1）——第2章を中心として——」（『印度学仏敎学研究』46-1，1997年）
- ・「『阿閼仏国経』と女性」（『仏敎史学研究』41-1，1998年）
- ・「蔵漢訳『阿閼仏国経』比較研究（2）——第1章を中心として——」（『印度学仏敎学研究』47-2，1999年）
- ・「『阿閼仏国経』チベット語訳資料について」（『日本仏敎学会年報』66，2001年）
- ・「蔵漢訳『阿閼仏国経』比較研究（3）——第3章を中心として——」（『印度学仏敎学研究』50-2，2002年）
- ・Bodhisattva and Śrāvaka in Akṣobhya Buddhaland, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol. 51-1, 2002
- ・Some Aspects of the Cult of Akṣobhya in Mahāyāna Scriptures, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol. 52-2, 2004
- ・「阿閼仏国土の声聞と菩薩の修行」（『種智院大学研究紀要』5，2004年）
- ・Entering Parinirvāṇa in Akṣobhya's Buddha field, *Journal of Indian and Buddhist Studies*, Vol. 53-2, 2005
- ・「阿閼仏信仰の諸相」（『日本仏敎学会年報』70，2005年）
- ・「大乘經典に引用される阿閼仏信仰の役割」（『頼富本宏博士還暦記念論文集 マンダラの諸相と文化』，法藏館，2005年）
- ・「阿羅漢による般涅槃の様相——禪定と神通力——」（『仏敎史学研究』48-2，2006年）
- ・「アクションブヤの誓願の特性」（『四天王寺国際仏敎大学紀要』41，2006年）

ツルティム・ケサン，小谷信千代

- ・『仏敎瑜伽行思想の研究』，文栄堂，1991年

ツルティム・ケサン，藤仲孝司

- ・『ツォンカバ中観哲学の研究』V, 文栄堂, 2002年
- 立川武蔵, 石濱裕美子, 福田洋一
- ・『西藏仏教宗義仏教』7, 東洋文庫, 1995年
- 長尾佳代子
- ・『『阿閼仏国経』の女性の記述の背景となった常識について——玉女宝をめぐる記述——』
(『パーリ学仏教文化学』9, 1996年)
- 中川和也
- ・『大乘涅槃経とアール・ヴェーダ』(『仏教学』26, 1989年)
- T・クロフォード著 (中川訳)
- ・『チベットの精神医学』, 春秋社, 1993年
- 中御門敬教
- ・『往生後論攷』(『高橋弘次先生古稀記念論集 浄土学仏教学論叢』, 山喜房仏書林, 2004年)
- 蓮澤成淳
- ・『仏説阿閼仏国経』(『国訳一切経』宝積部7), 大東出版社, 1932年
- 松下了宗
- ・『ジュニャーナガルバの二諦分別論 ——和訳研究(上)——』(『龍谷大学大学院紀要 文学研究科』, 1983年)
- 光川豊藝
- ・『初期大乘と『阿閼仏国経』——阿閼と阿弥陀仏の願文をめくって——』(『龍谷大学論集』434・435合併号, 1990年)
- 室寺義仁
- ・『ヴァスバンドゥによるアーラヤ識概念の受容とその応用』(『高野山大学論叢』28, 1993年)
- 望月海慧
- ・『チベット仏教におけるラムリム思想の基盤に関する研究』(改訂増補版), 2005年
- 山口益編
- ・『阿閼仏国経』(『仏教聖典』), 平楽寺書店, 1974年 (櫻部建担当)
- 芳岡良音
- ・『阿閼仏の浄土の起源』(『印度学仏教学研究』7-2, 1959年)
- ・『阿閼仏と阿弥陀仏』(『印度学仏教学研究』10-2, 1962年)
- 頼富本宏
- ・『密教仏の研究』, 法蔵館, 1990年